

名戸ヶ谷ビオトープだより

第47号 2011年秋号

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行

<http://nadogaya-biotope.org/>

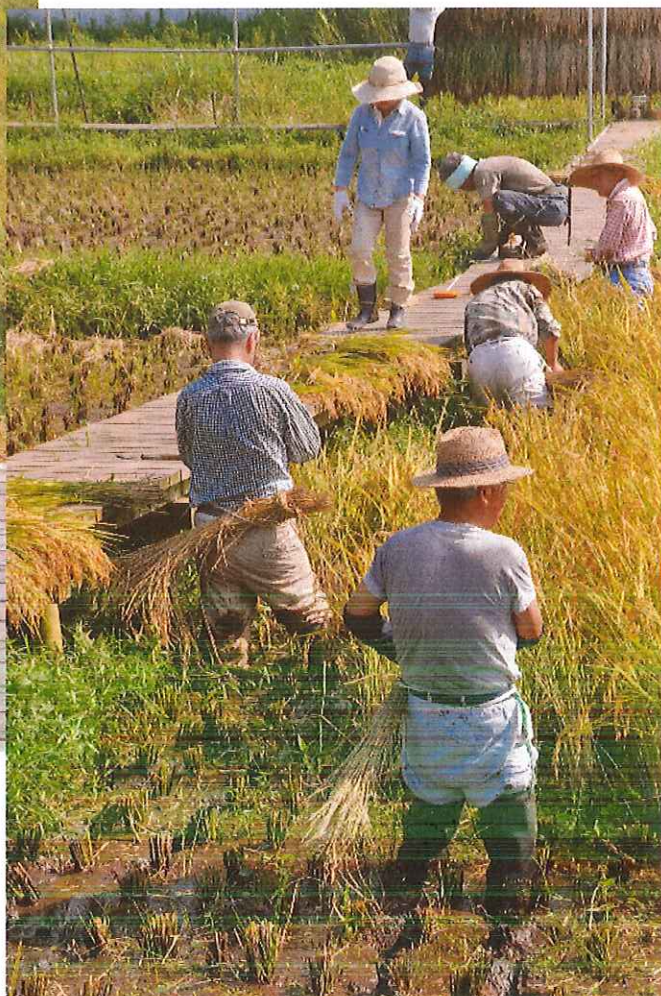
発行責任者：篠崎 将 Tel/Fax: 04-7173-6353

天候に左右された米づくりでした

今年の稲作りは、天候に左右された年でした。梅雨の雨不足と高気温、また稲の花が咲く時期にも好天が続きませんでした。稲刈りも猛暑と豪雨、最後には台風による稲掛け棚の倒壊。何とか脱穀作業にこぎつけましたが、空を見ながらの作業になりました。また、大地震による福島原発放射能事故からの名戸ヶ谷小学校の稲刈り中止といろいろありましたが、会員の協力で、10月2日に無事脱穀作業を終了し、粳摺りを藤心ライスセンターに依頼しています。収穫量は玄米にならないと詳細不明ですが、昨年より若干多めのようなようです。

(下表参照)

刈り取り時期になっても深い田んぼで皆さんの大奮闘で無事刈り取りを終了



今年の米の出来高

種類	精米後重量	昨年比
うるち米	約300Kg	+70Kg
もち米	約70Kg	ほぼ同じ

うらめしい超強風の台風15号

稲掛け棚は、3段にすると梯子を使うことになるので、今年は2段にしました。また、名戸ヶ谷小学校への持込みができないため、全長が昨年より1.5倍以上の約90mになりました。台風15号でほとんどが倒壊してしまい、作り直し・掛け直しに多くの人力がかかりました。



猛暑と豪雨の稲刈り

もち米の稲刈りは天候にも恵まれ、順調に進みましたが、うるち米の稲刈りは猛暑と豪雨の中で行われ、休日だけでは終了せず、平日の作業になりました。名戸ヶ谷小学校の児童

による作業は中止となりましたが、校長はじめ、**校長先生も泥田に挑戦**5年生の担任が頑張って挑戦しました。校長の差し入れ、ご馳走様でした。



せっかくの稲束が台風で倒れる 大変な作業が発生(上下)



脱穀も足踏みです

今年も、2台の足踏み脱穀機と唐箕での脱穀作業で、約300kgの粳を収穫しました。小雨の心配をしながらの作業でしたが、会員の熱気で小雨も吹き飛ばし、2

日間の作業で無事完了。今年藤心ライスセンターに粳摺りと精米を依頼しました。本当にお疲れ様でした。



雀より通行人が 楽しんだ案山子

雀避けネット掛けを今年も実施、例年より雀が少ないようでしたが、「なでしこジャパン案山子やパンダ案山子」と伴に、雀の被害を最小限に止めました。案山子の写真を撮る住民の姿が多く見られました。



かむわのホットスポットめぐり

葛ヶ谷 (くずがや)

ホットスポット葛ヶ谷は、中原小と柏南高との中間にある極めて小規模なエリアです。エリアは二段に分かれていて、上段はアカマツが主体の林でススキも生えています。下段は湿地となっています。

土地所有者の話によると、このエリアは、林を削り取った跡地だそうです。削り取られた土は新柏地域が開発された際に、その埋め立て用として利用されました。下段の湿地は、削り取られた跡地に地下水が浸出して出来たものと思われます。

上段も林を削り取った跡地です。削り取られる前の林は、明るいアカマツ林だったと言われています。二十年前の上段は一面のススキ草原でした。その頃にはオミナエシやセンブリも見られました。しかし、年とともにアカマツが増えてきて、いつの間にかススキ草原はアカマツ林に戻ってしまいました。今では、小さな一画でススキ草原の面影を見るだけになってしまいました。

その小さなススキ草原の一画と、湿地との間の斜面地には、貴重な植物が残されています。特に、ヒメハギ、ヒキヨモギ、ナンバンギセル、コシオガマは他の場所でも滅多にしか見られない貴重な植物です。これらの植物はススキ草原と結びついて生きてきた植物です。ススキ草原は人手が加わってはじめて維持できる自然環境です。手を加えずに放置しておくと、松林などへと移り変わってゆきます。2010年から、地権者の同意を得て、ススキ草原を維持するために幼木な



ヒメハギ



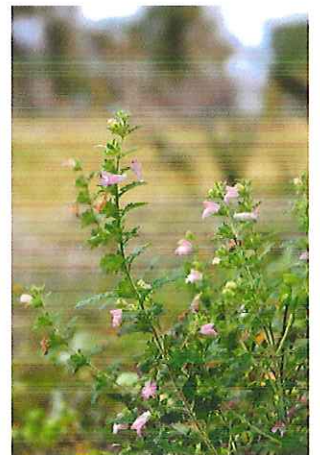
ヒキヨモギ



ナンバンギセル



コシオガマ



どを刈り取る作業を開始しました。

一方、下段の湿地には湿生植物が生え、水溜りや湿地環境を背景にした生きものを見ることが出来ます。植物では秋になると貴重なカリマタガヤが群生します。生きものとしては、ハラビロトンボやオニヤンマが湿地を行き交う風景が見られます。

カリマタガヤ



ハラビロトンボ



オニヤンマ

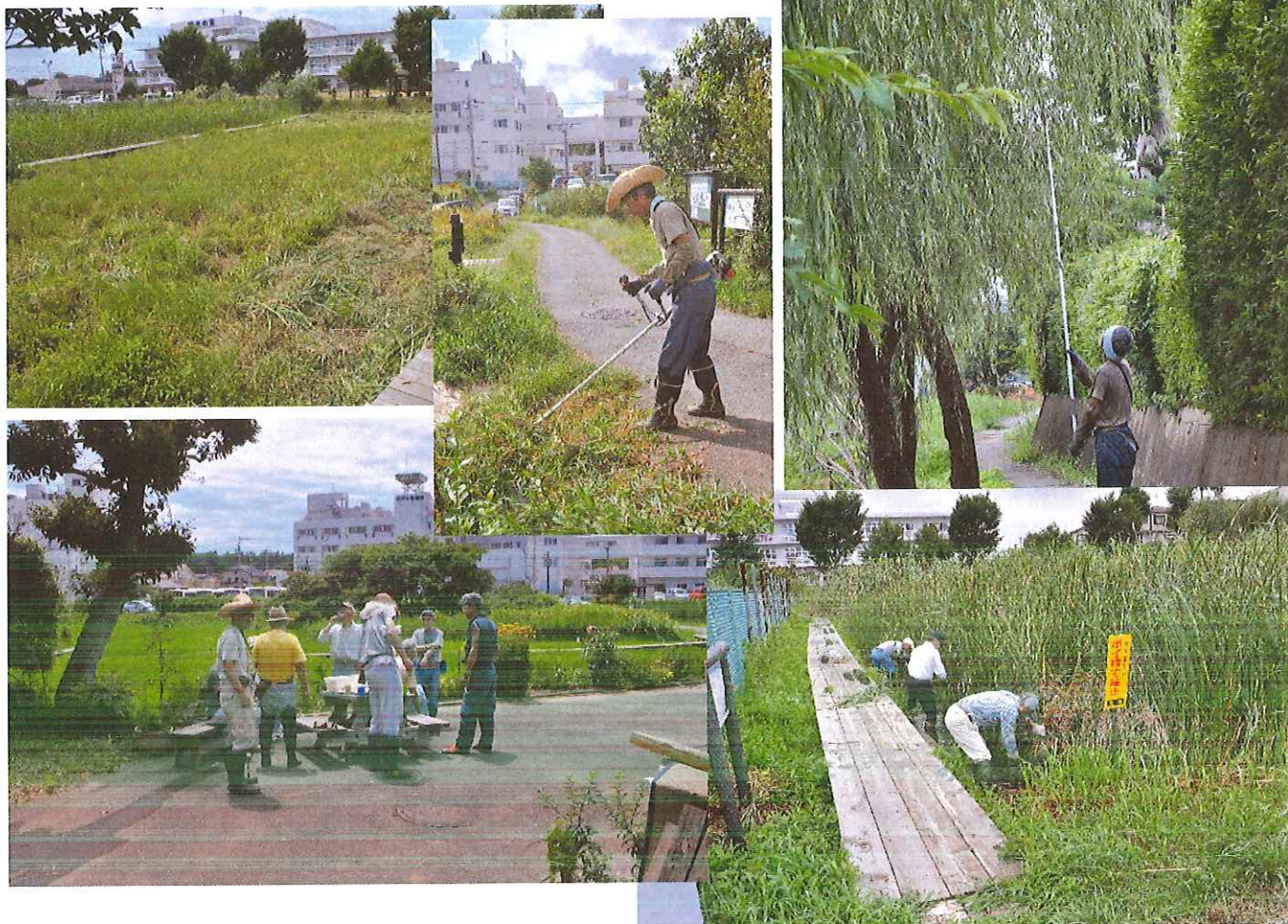


アオダイショウ



作業日誌から

7/18 (合同) 草刈り 8/6~7 道路草刈り 8/13 ネット掛け
8/20 (合同) 伸びた柳、ヨシ剪定



今年のホタル

7月7日、七夕でしたがあいにく空一面に雲が覆っていました。予定通りホタル観察会を行い、嬉しい事にBゾーンホタル用水路の回生の里側土手の中で2匹発光していました。それぞれ5m位の間隔でした。4月16日に放流し、無事に成虫となった事で感動でした。参加した会員4名の皆さんも確認し暫し見とれていました。去年の同時期に行った時は1匹で、今年は増えていて良かったです。

新しく放流したBゾーン南側の用水路は金網で仕切られていて明かりも反射し、全く観察できる状況ではありませんでした。

第2回目は7月14日に実施しました。残念ながら発光確認は出来ませんでした。名戸ヶ谷病院の増棟病室蛍光灯の明かりがこの場所まで届き(工事中?)又満月に近い月あかりで大変見つけにくい状況でした。前は病室の明かりの影響はありませんでした。会員の参加は家族を含め5名で、大変残念そうでした。

観察会は3回を予定していましたが、この様な状況下では観察は無理ということで中止としました。来年は生育環境を改善して更に増えることを期待したいと思います。

生きもの担当 藤平三郎

高柳児童センター ネイチャークラブのザリガニ釣り(7/17)

高柳児童センターネイチャークラブの皆さんがザリガニ釣りを兼ねてピオトープを見学しに。篠崎会長が説明役でした。



子どもたちはザリガニ釣りに夢中に

ビオトープとわたし 星合 正明

名戸ヶ谷ビオトープの会に参加させて頂き、速くも3年の月日が過ぎようとして居ます。

そもそも、ビオトープとの係わりは、私の家内が「お父さん、会社人間でいると定年後は、やる事がなく体を持てあましますよ!!」の一言です。

会員の「M」さんが、家内と他のボランティアで一緒に活動され且つ、田んぼに稲を育てお米の収穫を体験されて居るとの事、「お父さんも少し趣味を広げたらどうなの……?」

私、元々アウトドアが好きで、ビオトープに参加する迄は、地域の子供達の健全育成を、ある団体でリーダーとして約17年程携わっておりました。丁度体力の衰えを感じリーダーをリタイアして、間もない頃家内よりビオトープの話聞き、身体を動かす事が元々苦にならない性格だったので「まあ体験して見るとか……軽い気持ちで参加」しました。

大体何かに参加すると言うとき、軽い気持ちで参加するものが一般的ですよ!! ビオトープに参加する時も此のパターンでした。ビオトープとは、何なのか深く考えもせず、右も左も分からず活動は、月に一度位しか無いのよと言う口車に乗り参加を決めた次第です。ある団体の参加も同じパターンでした。

最初は、足の先位浸った程度でしたが、月日が過ぎると頭のとっぺん迄トップリと浸っていました。ビオトープもきくと、此のパターンと同じかも?

思い出す事3年前初めて田んぼに足踏み入れた時のことが脳裏によみがえります。此の田んぼは、不耕機栽培で稲を育成するので、機械栽培を行う田んぼと異なり田んぼの底が非常に深く、足を抜くコツを覚えるまで大変だよと大先輩のSさん、Tさんが言われました。

田植え初体験日のことです。腰迄の長い長靴をお借りし田んぼの中に恐る恐る足踏み入れました。田の中は、想像した以上に深く、足は、膝を越すまで潜り込みやっとの思いで、苗を泥の中に押し込みました。春とは、言え水は、未だ冷たく此が田植えなのだなとつくづく感じました。

植えるスピードは、ベテラン会員の足元にも及ばず遙かに遅くまるで、お邪魔虫の存在です。身体を移動するため田の中で、足を持ち上げようと片足に体重を掛け抜こうとしても、膝まで潜り込んだ足は、泥に攻め込まれびくともしません。悪戦苦闘している間にベテラン会員は、自分より何倍もの早さで苗を植えて行きます。田植えど素人の私の足は、泥に攻め込まれバランスを崩し、見事に尻餅をつきました!!

普段何気なく食べているお米は、今でこそ田植機で植えていますが、機械化される以前は、ビオトープの田植えの様に、お百姓さんが、手で植えていた事など、小さい頃の光景を思い出しました。お米にする迄は、田植えが済むと、草取り、稲が実れば、雀よけネット張り、稲刈り、脱穀と大変な作業が沢山ありました。

ビオトープに参加させて頂き、色々の事を体験させて頂き、本当に農作業とは、大変と言うことを、肌で体験する事出来ました。此からも、まだまだ皆さんに沢山ご迷惑掛ける事多いと思いますが、宜しくお願ひ致します。



鳥の渡り

日本で観察することの出来る鳥は、約500種といわれています。この中にはビオトープで年間見ることの出来るスズメ、ダイサギやコサギをはじめ、ツバメやオオヨシキリのように春日本に渡ってきて、夏に繁殖したあと秋には南方に移動する夏鳥、ツグミのように秋にシベリヤ方面から南下してきて、日本で冬を越す冬鳥、ビオトープでは見られませんが、多くのシギやチドリ類は繁殖地であるシベリヤ地方と越冬地であるオーストラリアやニュージーランドの移動の途中で日本を通過する旅鳥の4種に分けることができます。



ビオトープで観察されたクイナ

日本の国内だけを移動する鳥もいます。昨年冬にビオトープで2回観察されたクイナ(今年3月発行された千葉県レッドリストでは絶滅種になっている)は、繁殖のため夏は北海道や東北北部に移動しますが、冬は関東以西で観察されています。



オオヨシキリ

渡りは長い距離を移動しなければならず、多くの危険が伴います。多くの鳥たちはなぜ危険を冒して渡りをするのか、研究者たちが研究をしていますが、一般的には冬に少なくなる餌を求めて暖かい地方に移動し、春になると餌と共に北上してきたのが、大きな要因のひとつと考えられています。年間暖かいところで生活すればよいのと思いますが、地球儀を見ればわかるように北半球の寒帯、亜寒帯地方には広大な未開発の大地が広がり、この地方では短い夏の間膨大な数の昆虫が発生することが知られています。鳥たちも子育てするのに、この土地の広さと豊富な餌が魅力なのでしょう。

最も長距離渡る鳥は15000km以上と言われていますが、その他の渡り鳥も2000~6000km移動しています。渡りに使うエネルギーは大きく、渡りの前にたっぷりと体内に蓄えた脂肪も、目的地に着いた時にはやせ細っています。ビオトープで8月後半から見かけるウスバキトンボは、フィリピンやマレーシアから日本に渡ってきますが、渡りの途中で多くの鳥の蛋白源になって鳥の移動を助けているといわれています。

(文・写真:篠崎 将)

編集後記

この秋号も本来であれば9月末に発行する予定でした。毎回いいわけしているようですが、9月中頃、特に思い当たることもないのに高熱を発し、これは5月の手術の後遺症ではないかと、病院に駆け込みました。

医師も以前にあったようなウミがたまる症状ではないかと、心配になったようで、即入院、いろいろな検査を受ける羽目になりました。結果は、ウミではなく、別の内臓器官の障害だったようで、1週間ほどの入院で熱も下がり、釈放されました。

そんな訳で、9月の下旬は棒に振り、さあ、ビオトープだよりをまとめようとしたのですが、気力が萎えています。特に佐々木さんのご協力で、写真はたくさん集まっていました。また、原稿もかなりありました。しかし、これをまとめる力がわいてきません。そんなわけで、またまた、写真集のようなビオトープだよりになりました。

東電福島第1原発事故による汚染で柏市とその周辺はホットスポットになっていると言われ、この放射能を除染し、環境を守っていくために、これから難しい取り組みが必要になりそうです。名戸ヶ谷ビオトープの活動も有形無形の影響を受けると思われますが、それにめげずに進んでいきたいところです。

(高田昭治)